

小柄な体で、相手の懐に飛び込んでいく。これでもかと技を繰り出し、全面から攻める気持ちにじみ出ている。

けいこに通う大学の柔道部で、ある柔道家に出会った。

「目が見えなくても、組んでしまえば健常者と何も変わらない」。二〇〇四年のアテネ・パラリンピックで銀メダルに輝いた県立名古屋盲学校教諭の広瀬誠さん(三〇)。とても目が不自由には見えなかった。

昨年十一月に開かれた全日本

目も耳も録

ある柔道家

視覚障害者大会で十二連覇を達成し、北京パラリンピックの代表に内定。出げいこを重ねながら北京での金を狙うが、もうひとつの願いを聞いた。「柔道を通して、健常者と障害者の理解が進む一助になれば」

後日、大学から柔道を始めた女子学生が話した。「広瀬さんはまるで目が見えているみたいに、技を返されることを怖がらずに攻めている。私も頑張らな」と。広瀬さんの思いは確かに伝わっている。(加藤隆士)